

(7)大正・昭和以降

在郷商人の残した蔵が注目され、 ラーメンのまちとして知られるようになる

蔵のまち喜多方

古くからの市場である小荒井や小田付で味噌・醤油・反物・薬種などに関わった業者達や、質屋、酒造業者、漆器業者は、市内に多くの屋敷や蔵を残した。また、かつて農民は勝手に蔵を建てることができず、代官所に伺いを立てて蔵をつくっていたため、その制約がなくなった明治から大正にかけては、一般農家でも蔵を建てるのが流行した。

戦後、モータリゼーションや農作業の機械化が進むと、蔵の改造や取り壊しが進んだが、テレビなどのメディアを通じて喜多方の蔵が全国的に知れ渡るようになり、観光客が訪れるようになった。



甲斐本家の蔵座敷

ラーメンのまち喜多方

大正末期に中国人の手でラーメンが喜多方町にもたらされ、昭和50年代末に喜多方市の打った“ラーメンの街宣言”広告戦略が成功し、以来「蔵」と並んで喜多方の観光を牽引している。旧市内には、100軒を超えるラーメン屋がある。

周辺の農産物などを背景に市場のまちとして発展してきた喜多方は、現在、地元の食材や飯豊山地の伏流水をつかったラーメンに農村とまちのつながりの名残が、初市の祭に市場の名残いちばが残っている。